

平成 23 年度卒業式 式辞

本日、学士の学位をえた 9 1 3 名の学部卒業生のみなさん、修士の学位をえた 2 3 1 名の大学院修士課程修了生のみなさん、博士の学位をえた 6 名の博士課程修了生のみなさん、そして 1 0 名の特別支援教育特別専攻科修了生のみなさん、おめでとうございます。御来賓の本学同窓会の宮崎会長ならびに本学後援会の奥村会長、そして列席の理事・副学長、学部長とともにご卒業を心からお祝いたします。併せまして、ご家族あるいは関係者のみなさまにも、こころからお慶びを申し上げます。

さて、昨年の卒業式は、3・11 大震災の 2 週間後でありました。この大震災によって、私たちは地震、津波、そして原子力の利用というものの底知れぬ脅威を教えられました。それから半年後には、紀伊半島豪雨災害を経験し、雨、水、山というものの脅威を教えられました。

3・11 大震災から 1 年、紀伊半島豪雨災害から半年、被災地はいまだ復旧の道筋が描



けず、被災された方々は、未来への希望をもてない状況にあります。いや、世界の政治経済状況を見ると、被災地だけではなく、日本社会、人類社会全体が、未来への見通しを持たない状況にあることは、みなさんも認識されていることでしょう。

この 1 年、いや 1 年半、みなさんは自己の未来を切り開くため、「シュウカツ」に多くの時間を費やし、多くの方が、それぞれに卒業後の進路を定めておられます。しかし、先日 19 日の政府発表によれば、2010 年春の大学・専門学校卒業者のうち 4 分の 1 が 3 年以内に離職し、就職できなかった者を加えると実に

2 人に 1 人が無職か安定した職に就いていないということです。

こうした事態のなかにいることを直視するとき、私はいま社会に旅立つみなさんに安易な言葉を贈ることはできません。私に言えるのは一つだけです。

「あなた方の時間は限られています。だから、本意ではない人生を生きて時間を無駄にしないでください。ドグマにとらわれてはいけません。それは他人の考えに従って生きることと同じです。」「なによりも大事なものは、自分の心と直感に従う勇気を持つことです。あなた方の心や直感、自分が何をしたいのかももう知っているはず。ほかのことは二の次で構わないのです。」

こう言うと、なにを甘く非現実的なことを言っているのかと思えるかもしれません。しかし、私はいまあえて、「自分の心と直感に従う勇気をもて」と言いたいと思います。

この言葉は、実はアップル社を創設し、昨年9月に亡くなったスティーブ・ジョブズ氏の2005年6月スタンフォード大学卒業式でのスピーチの最後の部分です。

幼いヒトという動物として誕生したみなさんは、もともと「心と直感」にのみ従う個性的な動物でした。勇気があるからではありません。それが動物であるヒトの自然なのです。

「心と直感に従う」動物としての自然な時間の積み重ねこそが、実は、その人の自己の個性をつくり、自己に誇りが持てる人間となることができるのです。



いまみなさんを迎える社会は、若者世代を「たくましさ・タフさが無い」「内向きだ」「積極性がない」などと評しています。しかし、私の知見で言えば、決してそれはみなさんの責任ではありません。精緻に仕組みられた学校教育システム、それを求めてきた日本の産業社会、それに従うことで「わが子の幸せがある」と信ずる、信じざるを得ない親世代の「わが子への管理」が、みなさんの「自分の心と直感に従う勇気」を奪ってきたと言っても過言ではありません。

みなさんが、幼いヒトとして出会ってきた大人たちは、大人自身が描いた道筋に従うものを「評価」「賞賛」し、みなさんは、その「評価」「賞賛」の心地よさに「溺れる」なかで、ジョブズ氏が言うように「ドグマにとらわれ」、「他人の考えに従って生きること」に

なってしまったのです。「心と直感に従う勇氣」を育てられず、むしろ削ぎ落とされ、好奇心も冒険心も削がれ、想像力も創造性も育てられなかったと言うべきでしょう。

いま申し上げたことは一般的な分析です。ここには、こうした分析を越えて、秘めていた「自分の心と直感に従う勇氣」に気付き、時代の課題、自分の課題に立ち向かい始めた学友がいることを、誇りを持って伝えたいと思います。

今日の卒業生・修了生のなかには、あるいは卒業・修了を延期した同世代のなかには、「自分の心と直感に従い」、「勇氣」をもって行動した人たちがいるのです。

3・11大震災直後、串本出身の三人の大学院生は、津波に呑まれた三陸海岸の風景はわが串本の近い未来と直感し、

すぐに震災ボランティアを呼び掛けました。彼らの働きかけで、和歌山大学は8月2度にわたってボランティア派遣バスを出し、多くの学生が支援活動を行いました。彼らは、この東日本大震災支援の活動途上の9月、紀伊



半島の豪雨災害を知るや、直ちに現地に多くの学生とともに入り、支援活動を今日まで行っています。

また、3・11大震災によって生じた「心と直感」に従った学生もいます。彼女は、「シュウカツ」途上に3・11を体験しました。企業は求人活動を一時停止し、したがって彼女も「シュウカツ」は一時停止。この立ち止まった時期、「私の大学生活はこれでよかったのか」と自問したそうです。「学習も活動も充実していた。でもそれが大学に入った志だったのか」と。そして気づいたといいます。「私は留学して、海外での仕事をしたかったのだ。シュウカツをやめて海外に行こう」と。彼女は、昨年10月から休学し、ワーキングホリデービザを取り、去る1月16日海外へと飛び立ちました。

社会に旅立つみなさんにとって、企業や組織で仕事をするなかで、「自分がなにをやりたいかを知り」、その「自分の心と直感に従おう」とすれば、家族、友人、組織との衝突が予測され、また自分自身と激しい葛藤が生ずるでしょう。

その葛藤を乗り越えるためには、まずは、「自分がなにをやりたいか」を友人、他者に語ることです。他者に語り、対話することで、自分という存在の意味、この社会・この時代に生きる意味、そして自らの人生の幸せの方向を確かめることができるはずで、そのなかでは、おそらく更なる学びの必要性も自覚されるでしょう。

これはみなさんのような若者にのみ求めることではありません。現代日本の大学、とくに地方国立大学の現実を考えると、これは学長としての私自身の課題でもあります。

学長に就任する直前、私はちょうどこの場にいる学生たちが参加する演習で、「教育の現場・職場では、仕事のトラブルや抱える苦悩を語り合い、知恵を出し合い、お互いを支え合える人間関係を創り出すことが必要だ」「そのことによって、教育の場は、子ども・市民の人生に貢献し、制度への信頼も深まる」と論じました。するとひとりの女子学生が手を挙げ、「和歌山大学は、教職員が悩みやトラブルを語り合い、お互いを助け合い支え合う職場になっているのですか」と質問しました。その時、私は、学長として、そのような和歌山大学とするための努力をすると誓いました。

いま大学だけではなく、教育の場、組織が、過度な競争と数値的な評価に追われ、そこで働く人々を疲弊させています。私がジョブズ氏のメッセージに従うならば、それは過度な競争、過度な評価システムに抗して、教育の共同体、研究の共同体、そこに属する人々を幸せにする組織を創り出すための勇気を奮うこと、これが「私の心と直感」です。つまり和歌山大学長として、学生の生涯はもちろん、和歌山大学で働く教員、職員の生涯をも応援することに勇気を奮うこと、これをみなさんに誓いたいと思います。

私自身にその勇気なくして、若者にのみ求めるのは説得力がないことは明らかです。

和歌山大学は、「生涯、あなたの人生を応援します」とメッセージを発しています。みなさんが、卒業後改めて学ぶ必要を自覚したとき、新たな支えを必要とするとき、ぜひ母校・和歌山大学にリターンしてください。

最後に重ねて伝えたいと思います。和歌山大学は、みなさんの生涯を応援します。

2012年3月23日

和歌山大学長 山本健慈